様式１

令和６年度学長戦略経費（研究プロジェクト）実績報告書（研究実績）

１　研究課題名

豊かな運動経験を実現する学校向け運動プログラムの開発とその効果の検証

２　研究代表者

岩見沢校・教授・奥田知靖

３　研究分担者・研究協力者

研究分担者：
岩見沢校・教授・志手典之
岩見沢校・教授・山本理人
岩見沢校・教授・森田憲輝
岩見沢校・教授・安部久貴
岩見沢校・准教授・小倉晃布
岩見沢校・准教授・小林育斗

４　令和６年度研究計画の達成度

☐ a 計画とおり達成した
☑ b 概ね達成した
☐ c あまり達成できなかった
☐ d 全く達成できなかった

【c 又は d を選択した場合の理由や問題点】

５　学術的成果

【論文投稿】

1）志手典之・奥田知靖・森田憲輝．小学生男子における形態発育とリバウンドジャンプ時のパワー発揮能力との関係について．北海道教育大学紀要教育科学編【投稿中】

2）小学校児童におけるＮ チャレンジアジリティテストと新体力テストとの関係．森田憲輝・吉村 茜・石原 暢・奥田知靖．体力科学 第 74 巻 第 3 号【投稿中】

【書籍出版】

特になし

【学会発表】

1）日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会．2024 年 8 月 29 日（木）～8 月 31 日（土）．福岡市．森田憲輝・鈴木哲平・榊善成・白川和希・山本理人・

志手典之・奥田知靖. 小学生の体力・スクリーンタイムとレジリエンスの関係.

2) 日本コーチング学会. 2025 年 3 月 6 日（木）～3 月 7 日（金）. つくば市. 奥田知靖・安部久貴・小倉晃布・志手典之. 奥田知靖. ゴール型ボールゲームおけるパスによる鬼遊びが児童の戦術能力の変化に及ぼす影響.

3) 日本発育発達学会第２３回大会. 2025 年 3 月 15 日（土）～3 月 16 日（日）. 奈良市. 奥田知靖・志手典之・森田憲輝. 小学校体育授業における短時間の準備運動プログラムが児童の体力・運動能力および心理的スキルに及ぼす影響.

4) 日本発育発達学会第２３回大会. 2025 年 3 月 15 日（土）～3 月 16 日（日）. 奈良市. 森田憲輝. シンポジウム「運動と脳の発達について考える：運動・体力と学業成績の関係について」.

【その他】

特になし

6　実践的成果

【教材】

特になし

【評価方法】

1) N チャレンジテスト（アスリート版）
　これまでに，内容的妥当性および信頼性が確認された N チャレンジテストを改良し，中学年～高学年向け，或いは日常から運動スポーツを行っている児童・生徒向けのテストを作成し，データ収集をおこなった.

2) N チャレンジテスト（リアクティブ版）
　上記 1) のテストをさらに改良し，球技場面で頻出するようなリアクションを伴ったアジリティテストを作成し，データ収集を行った

3) 3X3 ボールゲームテスト
　ゴール型球技種目における戦術能力を評価する方法について検討した．ビデオ撮影した映像から，児童の位置情報を算出し，ゲーム中の位置取りを評価した．日本コーチング学会（2025/3/6-3/7）にて学会発表を行った．現在，ビデオ撮影によらない方法についてもデータ収集している.

【指導（授業）案】

特になし

【教育方法】

1) 準備運動プログラム_スライドボール投遊び
　本プログラムの検証結果について，日本発育発達学会（2025/3/15-3/16）にて学会発表を行った.

2）体育の集合までの時間の活用_サーキット
　本プログラムの検証結果について，日本発育発達学会（2025/3/15-3/16）にて学会発表を行った．

2）準備運動プログラム_パンサーボール
　本プログラムの検証結果について，日本コーチング学会（2025/3/6-3/7）にて学会発表を行った．

【その他】

1）令和6年度一般社団法人岩見沢青年会議所4JC合同例会．子どもに追っての運動の重要性と生涯スポーツ社会．2024年8月17日．岩見沢市．プレゼンテーション．25名．

2）第 126 回 岩見沢ネクストロータリー衛星クラブ例会．幼少期における子どもの運動能力の開発と運動指導．2024年11月27日．岩見沢市．プレゼンテーション．11名．

3）2024年度空知青陵会教育実践交流会．ボール運動（バルシューレ）の方法．2025年1月25日．岩見沢市．実技演習．45名．

4）CAPS-Childスポーツ指導者講習．生涯スポーツとアスリート育成に向けた指導理念．岩見沢市．2024年9月23日，2025年2月4日．プレゼンテーション．15名．

7　その他、研究実施状況

特になし

8　使用者や研究協力先等から受けたアドバイス等

1）準備運動_スライドボール投遊びについての意見（分析結果・考察を含む）
①チームで得点を競うルールで互いの話し合いを促す取組であった．取り組み後に，「他者への気づき」の項目において負の影響が見られた．先行研究によると，この負の影響は必ずしも悪いとは言えないが，チームでの取り組みという点でこのような影響になった可能性も考えられるため，児童の運動課題への意欲を引き出すために個人戦（個人内の記録の変化）を導入し，記録する方法も試してもよいかもしれない．
②チームで得点を競うルールのため人数調整に時間がかかり，実施時間が少なくなるため，個人戦とチーム戦の適度な「組み合わせがあった方が良いかもしれない．
③具体的な介入指導を行っていないため，児童によって「できる・できない」が分かれ正しい動きを引き出せないまま終わってしまう可能性もある．

④運動課題実施の動機付けを高めるために，点数化し，毎回得点を記録する予定だったか，記録に時間がかかるため，実施は難しかった．
⑤クラスによって異なる効果が得られた．これは介入プログラムやテスト実施時の児童の取り組み状況が，その一因となっている可能性が考えられるため，児童の体力・運動能力の変化を捉えれる評価方法についても再考する必要がある．

2）サーキット_体育の集合までの時間の活用（分析結果・考察を含む）
①4 種類の様々な運動の組合せにより，短時間で全身運動ができてよかったという意見であったが，これがアジリティや立ち幅跳びの記録の向上には現れなかったため，「どのように行うか（運動課題への動機付け）が必要である．また，タイムの速さ等の測定項目以外の別の評価項目を設けることも検討する必要がある．
②運動課題への動機付けを高めるために，何週まわれたか記録していく予定であったが，時間の都合上難しかった．
③サーキットの内容に慣れが生じたときに，正しい動きではなく適当な動作になるため，頻繁に運動内容の変更の必要性を感じた．
④今回のサーキットトレーニングは，走る場所にテープを張りっぱなしで準備がほとんどいらなかったが，内容を変えようと思うと専門的な知識と準備に時間を要するため，学校現場では容易な作業ではないと考えられる．
⑤全員，最低でも 1 周は走るようにしたが，運動できる児童が早く体育館に入ってきて何周も走っていた印象があるため，普段運動に親しんでいない児童が取り組めるような動機づけが必要と感じた．

3）パンサーボール_準備運動（分析結果・考察を含む）
①ボールの代わりに「ぬいぐるみ」を使用したことにより，パスをキャッチできなかったとしても不必要に転がらず，スムースなゲーム運営となった．
②4 年生に対し，20 秒の実施を繰り返したがちょうどよい時間であった
③児童を見本としながら，どこにチャンスがあるか等の問かけなどが行え，児童が自ら戦術的な気づきを得やすい課題であった．
④また，戦術的気づきに加え，鬼遊びのため，児童の運動量の確保できると思う．
⑤グループの学習のため，コーン等で場所を区切る必要があり，準備に少し時間がかかることが改善点である．